



学会スタッフ体験報告 (第8回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム)

(2年)江崎宗一郎, 橋本美穂, 水田夕稀, 三宅俊介 (1年)中野希望, 難波七海, 山田茉莉乃

概要 2014年11月15-16日に開催された、第8回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウムに、熊本大学薬学部の1-2年生7名がスタッフとして参加した。メンバーの多くは、今回初めて学会に参加した。スタッフとしての活動を通して知ったこと、学んだことについて、報告する。

Q1. 学会とはどのようなものか? また、第8回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウムの目的や特徴はどのようなものか?

1. 学会とは?

一般には…

研究成果を公開発表する場である学術機関

- 査読、研究発表会、講演会、学会誌、学術論文誌など、研究成果の発表の場を提供する業務を行う。
- 日本薬学会、日本生化学会、日本腎臓学会など。

「学会に参加する」などと言う場合には…

研究成果を発表し議論するための学術会議

- 様々な発表で構成される、研究者・実務家の間で情報交換を行なうための重要な媒体。
- 日本薬学会第134年会、第86回日本生化学会大会、第58回日本腎臓学会学術総会など。

2. 医療薬科学部会とは?

日本薬学会

化学系薬学部会

医療薬科学部会

生物系薬学部会

構造活性相関部会

etc...

- 日本薬学会の中に設置された部会の一つ。
- 医療薬科学*に関する学術の進歩普及、研究基盤の充実・強化とその臨床応用を図る。

- 疾病治療・健康維持に貢献し、医療の向上に寄与することを目的とする。

*医療薬科学…医療での応用を特に志向した薬科学。

3. 次世代を担う若手医療薬科学シンポジウムとは?

- 次世代の医療薬科学の発展を担う、国際的にも活躍できる若い研究者の育成が重要。

- 医療薬科学を志す若手研究者が一堂に会し、研究内容はもとより医療薬科学の将来の方向性についても議論する場にするべく、2007年にスタートした。

- 前回の第7回シンポジウムでは、「学際的研究の推進による医療薬科学研究のパラダイムシフト」をテーマとし、異分野の研究者との忌憚のない意見交換の場を提供することを目指した。

- 第8回では、分野横断研究をより発展させる。

4. 第8回の開催概要

メインテーマ

分野横断・融合型の医療薬科学研究の推進を目指して

日時: 2014年11月15日~16日	(参加者)
会場: 熊本大学薬学部	事前参加申込: 173名
実行委員長: 首藤剛	当日参加申込: 6名
(熊本大学大学院薬学教育部)	基調講演・教育講演: 2演題
副委員長: 伊東弘樹	シンポジウム: 13演題
(大分大学医学部附属病院)	一般演題(口頭)申込: 24演題
事務局: 熊本大学大学院薬学教育部	一般演題(ポスター)申込: 43演題
遺伝子機能応用学分野	ラウンドテーブル申込: 123名
主催: 日本薬学会医療薬科学部会	意見交換会申込: 129名
協賛: 熊本大学薬学部同窓会	ランチョンセミナー申込: 142名
熊本国際観光コンベンション協会	

5. 講演・口頭発表

● 講演

分野横断、およびトランスレーショナルリサーチをキーワードとして講演が行われた。

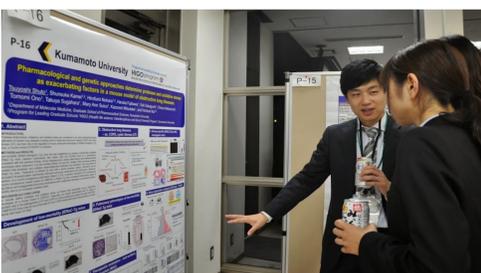
基調講演	甲斐 広文 (熊本大・院薬)	Chemical Medicine と Physical Medicine の今後の医療への応用
教育講演	伊東 晃成 (千葉大・院薬)	未来を予測する科学
ランチョンセミナー	関 由行 (関西学院大・理工)	STAP 細胞問題から考える、これからの科学と科学者のあり方
シンポジウム 1	熊本大薬学部各研究者	トランスレーショナルサイクルを加速する循環型育薬リサーチ 熊本大薬学部からの発信
シンポジウム 2	九州内の各大学研究者	若手研究者による分野横断・融合型研究
シンポジウム 3	各病院薬剤部薬剤師	病院薬剤師によるトランスレーショナルリサーチの最前線

● 口頭発表

24演題の発表が行われた。会場はほぼ満席で、発表後の質疑応答も活発だった。座長、発表者、質問者が知人同士であるらしいと感じることが何度もあり、大学を超えて研究者間の交流が進んでいることが感じられた。

6. ポスター発表&意見交換会

- ポスター発表会場では、43演題の発表が行われた。口頭発表とは違い、主に1対1で説明が行われ、納得の行くまで議論が交わされていた。
- 初日の夜には、立食形式の懇親会と同時進行で、ポスター発表に関する意見交換会が行われた。堅苦しくない雰囲気、活発な質疑応答が行われていた。また、普段会うことのできない全国の研究者同士が交流を深めている様子が随所で見られた。



7. ラウンドテーブル

- 参加希望者を、研究分野をもとにグループ分けし、各グループで昼食を食べながら、フリーディスカッションを行う企画である。できるだけ異なるトピックを行う研究者同士をグルーピングすることで、分野を超えた出会いの場を提供することを目指した。
- 123名が参加し、12のグループに分かれて実施された。和やかな雰囲気の中、それぞれの専門分野の説明や、共同研究に関するディスカッションなどが行われていた。



8. 優秀発表賞

医療薬科学部会の趣旨を踏まえ、臨床研究および医療志向性が強い基礎研究で、科学的に優れた演題が選定された。

- 長野 一也 (独立行政法人医薬基盤研・バイオ創薬PJ)
「がん細胞分泌エキソソームの血管新生における機能解析」
- 濱村 賢吾 (九州大・院薬・薬剤学)
「慢性腎臓病モデルマウスにおける分子時計機構の腎・肝・腎連関を介した新規腎機能悪化機序の解明」
- 永尾 紗理 (熊本大・院薬・薬剤学)
「一酸化炭素付加型ヘモグロビン小胞体は抗炎症・抗酸化作用を介してプレオマイシン誘発線維症を抑制する」
- 張 佳明 (九州大・院薬・薬理学)
「デュロキセチンのP2X4受容体阻害効果および神経障害性疼痛改善作用の評価」
- 西郷 智香 (熊本大・医・附属病院薬剤部)
「虚血再灌流性腎障害ラットにおけるメクロフェナム酸の腎保護効果」
- 野原 寛文 (熊本大・院薬・遺伝子機能応用学)
「GLP-1受容体アゴニストExendin-4は、COPD様モデルマウスにおける粘液過剰分泌症状を増悪する」

A1. ● 学会とは、研究発表の場であると同時に、研究者同士が直接会って情報交換を行い、交流を深めるための機会である。
● 第8回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウムは、異分野の若い研究者同士が意見交換を行い、分野横断型の研究、トランスレーショナルリサーチを進展させることで、医療に貢献することを目的とする学会である。若手研究者が参加者の中心となり、テーマ性の強い講演やシンポジウムが行われ、また、異分野の研究者同士が会うための企画や工夫が盛り込まれていたことが、大きな特徴である。

Q2. 学会スタッフの業務内容はどのようなものか？ また、スタッフにはどのような心がけが必要か？

1. 概要

- スタッフ…計 31 名 (実行委員長・副委員長含まず)

内訳…職員 : 3 名

遺伝子機能応用学分野学生 : 21 名

1-2 年生 : 7 名

- スケジュール

11 月 11 日 (火)	事前ミーティング
11 (火) - 13 日 (木)	事前準備
14 日 (金)	前日ミーティング、設営
15 日 (土)	当日業務
16 日 (日)	当日業務、撤収
17 日 (月) 以降	決算業務等 (事務局)

実行委員長からスタッフへ訓示

- 学会の成功は、スタッフだけでなく**参加者の満足**につながる。さらには、**全国へ向けた熊葉のアピール**にもなる。
- 「**おもてなしの心**」を持って対応し、スタッフ、参加者双方にとって有意義な会とすることを目標そう。

2. 総合受付・事務局 (6 名)

プログラム作成、各種書類作成、機材の手配など、**事務の大半**を行う。当日は、総合受付として**来場者の受付**や問い合わせ対応、トラブル発生時の対処などを行う。

- 事前準備

ネームカード準備、各種名簿作成、無線 LAN 登録用準備物手配、ラウンドテーブル配布資料準備、抄録集作成、軽食・飲料等購入、意見交換会用雑品準備、優秀発表賞投票用紙・回収箱作成、意見交換会後のタクシー予約、各種事務用品購入、パソコン・プリンター・コピー機確保、謝金・釣り銭準備、各種設置資料準備、弁当手配、世話人会資料作成、など多数。今回は、これらは主に職員が行った。

- 前日

会場設営、設置物・準備物確認、受付リハーサル、**ポスター会場への映像中継設定**。中継は、当初考えていたとおりには行かず、試行錯誤を繰り返してようやく上手くいった。

難波七海、山田茉莉乃

(色を付けたものは実際に参加した業務)

- 当日

参加者受付、質問対応、**会場内軽食・飲料補充**、**優秀発表賞審査表回収**、**優秀発表賞集計**、**ネームカード回収**など。時間帯によって受付に来る人数が異なるため、主に朝のピーク時に受付を担当した。それ以外の時間は飲料的の補充などを行った。当日は気温が低かったため、コーヒーの補充が重要だった。コーヒーメーカーが壊れるトラブルがあったが、すぐ業者に連絡し、無事対処できた。

業務の感想、気づいたことなど

- 講演者かポスター発表者かなど、参加者に応じた受付が必要だったが、色分けされたネームカードや、よく整理された名簿などが準備されており、スムーズに対応できた。事前準備の大切さを感じた。
- 参加者の方が皆さん好意的で、この会の連帯感、雰囲気の良いさを感じることができた。

3. メイン会場 (4 名)

機材を設置し、**進行アナウンス**、**照明操作**、**マイク渡し**、カメラ撮影などを行う。



- 事前～前日

マイクなど機材確保、接続確認、アナウンス原稿作成、時計・ベルなど備品準備。

- 当日

進行アナウンス、照明操作、質問者へのマイク渡し、進行用スライド映写、PC 対応席担当、演者・座長へ飲料提供。



- この業務は、実際に参加はせず見ていただけだったが、参加者から見えないところで確実に機械を操作し、また質問者にマイクを素早く渡していた。口頭発表がストレスなく進行するために重要な業務であると感じた。

4. PC 受付 (3 名)

水田夕稀

発表者の **PC を確認**し、口頭発表が円滑に行えるよう**設定を調整**する。



- 事前～前日

会場設営、演者確認用 PC 設置、受付リハーサル。

- 当日

来場者の PC を預かり、**スクリーンセーバ**、**解像度などの設定確認**。ほとんどの参加者は正しく設定済みであった。

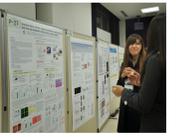


- 発表者の方は皆さん協力的で、大きなトラブルもなく確認を終えられた。以前、日本薬学会年会に参加したことがあるが、その時と比べて若い参加者が多かったのが印象的だった。会の特徴が出ていると感じた。

5. ポスター会場 (6 名・意見交換会と兼務)

中野希望、橋本美穂

会場を設営し、**ポスターを掲示**する。また、メイン会場の映像を中継で放映する。

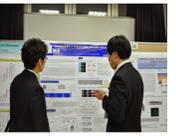


- 事前～前日

演題番号準備、画鋏など備品準備、マイク確保、**会場設営**、**中継機材設置**。

- 当日

ポスター掲示、**中継確認**。人の少ない午前中は、主にメイン会場で講演を聞いた。



- 設営した時点では会場が広すぎるように感じたが、実際始まると多くの参加者が来て、結果的には混みすぎず閑散としすぎない、丁度良い広さだった。参加者の人数から必要な広さを見積もる能力、経験が必要だと感じた。

6. 意見交換会 (6 名・ポスター会場と兼務)

中野希望、橋本美穂

食事・飲料を手配し、会場を設営する。当日は、**食事・飲料の提供**を行う。また、簡易クロークで荷物を預かる。

- 事前～前日

冷蔵庫・クーラーボックスの確保、生協・福寿司へ食事の手配、**机・椅子設置**、**食事・飲料準備**、**雑品準備**、**簡易クローク準備**、**片付け打ち合わせ**。

- 当日

食事の配膳、**飲料の提供**、**簡易クローク受付**。会の直前が業務のピークで、始まってからは主に飲料的の補充を行った。

- 会が始まってしまうと、ほぼセルフサービスで進行し、給仕の必要はほとんどなかった。食事や飲料などの事前の準備がきちんとできていたからこそ、このようにスムーズに進行して、楽しい会となったものと思われる。

7. ラウンドテーブル・ランチョンセミナー (5 名)

三宅俊介

各会場を設営し、**参加者を誘導**する。定刻に**弁当を配布**し、終了後回収する。



- 事前～前日

弁当手配、部屋の鍵確保、**案内標識準備**、**会場掃除**、**机・椅子設置**、**軽食・飲料準備**。

- 当日

弁当配布、**参加者誘導**、**ゴミ回収**。企画の開催時間以外は、朝は総合受付、夜は意見交換会の業務を手伝った。



- 会場がキャンパス内で分散していたので、限られた時間の中で各会場へ誘導することが難しかった。あらかじめ用意していた案内標識が役に立ったが、迷っている方に直接声をかけて案内することも、同じくらい大切だった。

8. クローク (3 名)

メイン会場横をクロークとし、**来場者の荷物を預かる**。

- 事前には会場設営、荷札・ハンガーを用意した。当日は、来場者の荷物を預かり荷札を渡し、終了後に返却した。番号つきの荷札のおかげで、特にトラブルはなかった。

9. 会場誘導 (4 名)

江崎宗一郎

正門他、屋外の各ポイントに立ち、**来場者の誘導**を行う。

- 事前には、案内標識準備、駐車場ゲートの鍵確保を行った。当日は、**会場と駐車場**で**来場者誘導**を行った。

- 来場者への事前の案内がしっかりしていたので、比較的スムーズに誘導ができた。遠方から来ている方も多く、大きな荷物を持っている様子が見られた。余分に歩かなくて良いよう、行き先を丁寧に案内するように心がけた。

A2. ● 事前には、各種書類作成や機材の手配、会場の設営など多くの準備業務がある。当日には、受付、誘導、発表会場の進行、意見交換会の開催などの業務があり、プログラムに沿って時間ごとに必要な業務が変化していく。そのため、多くのスタッフが連携して動いている。

- 事前に十分な準備、シミュレーションをすることはもちろんだが、当日は予想より人手の足りていない業務を手伝うなど、臨機応変に対応することが大切である。研究者同士が交流する大切な場を作る、という意識を持ち、自ら積極的に動くことが必要である。

感想

- 今回は、スタッフとして学会に参加したが、業務の空き時間に講演や発表を聞くことができ、参加者としての体験もすることができた。詳しい研究内容についてはまだ理解できない部分が多かったが、異分野の融合や、医療と連携したこれからの研究のあり方など、本会の目指す方向は感じられたように思う。今後、自分で研究を行うことになるが、今回知ったこれらの考え方を忘れず、医療の向上に貢献できる研究を行っていきたい。
- 書類、機材、食事など、事前に準備する物がこれほど多いということには、参加者の立場だとなかなか気づけないと思われる。これらの作業を外注するのではなく、学会の参加者でもある関係者が自ら行うことで、より行き届いた運営ができ、参加者の満足感につながるのだと感じた。